

令和6年度探究的な学びを中核とした 「学びの変革」カリキュラム研究開発事業

先進的モデル地域：三次中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
三次市立河内小学校	3	15
三次市立三次小学校	12	233
三次市立三次中学校	5	118

(R6.12.1現在で記入)

1 研究の概要

(1) 研究テーマ

主体的な学びにつながる自己指導能力の育成
～コミュニティ・スクールを活用した探究カリキュラム開発を通して～

(2) 特色

探究 × 地域社会との共創

(3) 系統的に育成を目指す資質・能力

- ・コミュニケーション能力
定義：自分の考えを持ち、他者の思いを受け止め、言葉で伝え合うことを通して、互いを理解し、認め合える。
- ・協調性
定義：目的と目標を共有し、目標達成のために、自らの役割を理解し、他者と協力できる。
- ・主体性
定義：自らの夢と志を持ち、自ら行動することで新たな価値を生み出し、積極的に他に貢献しようとする。

(4) 研究内容の概要

探究的な学びを中核にしたカリキュラム開発

教科横断的な学習を推進するために、各教科等や学校行事を関連付けて単元内容等を構想する。また、中学校区的全教職員で行う全体研修を意図的・計画的に実施することで、小小連携や小中連携を積極的に図り、PDCAサイクルを回していく。さらに、コミュニティ・スクールの効果的な活用により、児童生徒が地域や社会と関わる中で様々な職業に触れ、キャリアプランの構想につなげることができるようにする。そのために、日頃から地域の方や専門家等と関わり、共に活動し協力を得ることのできる持続可能なシステムを構築する。

PBLの考え方を取り入れた総合的な学習の時間の単元開発

児童生徒にとって身近な地域の方から依頼をされたり、地域社会のことを知っていく中で課題を見出させたりするなどして、探究内容に対する意欲を高めさせる。また、生徒が目標とゴールイメージを持ち、見通しをもって活動することができるよう、児童生徒の思考の流れに沿った探究内容にしていく。その際、一連の活動を3つの部に分けることで、見通しを立てやすくする。また、児童生徒の探究を深化させるため、コミュニティ・スクールの活用を通して、生徒が多様なひと・もの・ことと関わりながら、専門的な知識を得たり、取組に対する他者評価等を踏まえて改善に繋がったりすることができるようにする。

2 実践事例

(1) 河内小学校の実践

○対象 第5・6学年（2学級7名）

○単元名 つながる河内～人と人とのつながりプロジェクト～

○目標

地域のひとと人とのつながりを次世代につなぐ方法を考え、実行する活動を通して、河内の地域のよさに気づき、河内のよさを次世代につなぐために取り組まれている方々の思いや知恵、工夫を理解し、地域のよさを次世代につなぐために自分にできることを考えるとともに、町づくりに積極的に関わることができるようにする。

○地域社会との共創

「しあわせこうち食堂」を運営されている地域の方から地域への想いを聞き、自分たちも地域の一員として「河内のためにできることは何か」を考えた。地域のひとと人とのつながるための新たな場を創造することができた。

○実践内容

まず、河内の一人ひとりが主役となる町づくりを目指して活動されている地域の方の話を聞き、地域のよさと課題を明確にした。

第1部では、「人と人とのつながる場」を大切にしている「しあわせこうち食堂」に焦点を当て、人と人とのつながりがさらに深まるにはどうすればよいか、自分たちに何ができるのかについて改善案を考えた。

第2部では、改善案がお客様の喜ぶものになっているか調べるためにアンケート調査を行い、改善案を修正して「しあわせこうち食堂」で実際に活動した。児童が考えた改善内容は、事前にたくさんの方に「しあわせこうち食堂」を知ってもらうためのチラシの工夫、「人と人とのつながる場づくり」として「折り鶴を一緒に折るコーナー」「リラックスコーナー」、第3・4学年と協力して行った「はぶ草茶カフェコーナー」「みんな一緒に体を動かそうコーナー」等である。

第3部では、「人と人とのつながり」を視点に第2部を振り返り「飲食コーナー」を設けることでさらに充実することができた。児童は「地域の人がお弁当を持って帰るのではなく、食堂でみんなが料理を食べてもらえることでたくさんの方のつながりが生まれてよかった。」と活動を振り返ることができた。

(2) 三次小学校の実践

○対象 第5学年（2学級33名）

○単元名

つながる三次 ～グッドサポートタウン計画（防災）～

○目標

防災・減災についての認識を深め、自助、共助の重要性を理解した上で、自宅や地域における被害予測や防災状況を確認させると共に、課題を設定し、その解決に向けた探究活動を進め、自分自身も含めた学校区に住む人々の命を守るために、主体的に地域の人々と関わり、より安全・安心な地域となるよう工夫、改善をし、実践しようとするができるようにする。

○地域社会との共創

家族や地域の防災士の話から、三次町の防災についての問題点を洗い出し、その対策について考え、活動を行った。活動を知った地域の方から専門家の紹介や発表場所の提供など、新たな学び



の場を広げることができた。

○実践内容

昨年度、児童は、三次市の職員や地域の防災士から、身近な3つの大きな川による過去の水害の歴史や、水害対策が実施されてきた経緯などを学んだ。そして、自分たちが水害に遭った時の避難方法や、防災対策についても考えた。

第1部では、家族や防災士に三次町の防災に関する不安や問題点についてインタビューを行い、問題の洗い出しを行った。その後、問題の解決策について考えた結果、「100人分の食事作り」「避難グッズづくり」と2つのゴールを設定した。

第2部では、保護者アンケート等から、第1部で設定したゴールが避難所や各家庭においてポリ袋など身近なもので簡単に作れ、大変役立つことを確認した。防災士より「三次町は、避難所での生活体験を一度しかしたことがないので、是非チャレンジして欲しい。自分たちも初の試みなので楽しみだ。」と言って頂き、計画を実行に移した。その後、避難所体験に来られなかった人たちにも取組を知ってもらうために、作成した防災グッズを三次ふれあいフェスタに展示した。自治会長さんから「いらなくなった子ども服を活用し防災服を作る等、安く簡単で便利な必需品を考える子ども達の発想力に驚いた。」といった評価をいただくと共に、「自分たちも地域の役に立てるんだ。これからも地域のためにできることをしたい。」といった児童の地域社会の一員としての意識を高めることができた。

第3部における活動全体の振り返りでは、「計画段階で、中学生のように地域の方へのアンケート実施について考えておくべきだった。」と、三次ふれあいフェスタで活動していた中学生の姿から学びを深めている記述が見られた。また、「今のままでは、大体の予想ばかりなので、次に活動する時には、きちんと結果を見通して確認できるように計画を立てたい。」等と、客観的に自分たちの活動を振り返り、次に生かそうとする記述もあった。現在は、三次市教育委員会の方からの「防災と福祉を合体させてはどうか」という意見から着想を得て、「みんなで助け合おう！防災手話ダンスのDVDを作ろう。」と、地域ぐるみの防災活動について考えている。



(3) 三次中学校の実践

○対 象 第3学年（3学級34名）

○単元名 みよしまちガイド

○目 標

「三次ふれあいフェスタ」への参画を通して、三次に住む人々のふれあいを増やすために、地域の中で様々な活動や取組を行う人々の存在やその人たちの思いを理解し、地元三次の良さを伝える視点から、これまでの学びを生かした地域貢献の方法について考えるとともに、自分も地域の一員であることを自覚し地域のためにできることを考え、積極的に関わることができるようにする。

○地域社会との共創

三次地区自治連合会の会長からの要請を受け、三次町を盛り上げるための企画を考え、地域の祭りへ参画した。実行に向けて、コミュニティ・スクールの方々に企画検討から本番まで伴走してもらう中で、様々な視点に基づく評価を受けながら、企画を練り直し、学びを深めることができた。

○実践内容

第1部で、生徒たちは、第1学年の地域学習でもお世話になった三次地区自治連合会の会長から「一緒に三次町を盛り上げよう！」と言われ、三次ふれあいフェスタで企画を実行していくことにした。目標を「地域の人と三次を盛り上げる」と決めた生徒

たちは、第1学年の時の企画を叩き台として、目標の達成方法の違いから、3つのグループに分かれてそれぞれ企画を作り、伴走者となるコミュニティ・スクールの方から提案した。

第2部では、企画を改善しながら準備を進めた。例えば、特産品の三次ピオーネを使ったポップコーン販売を企画したグループは、コミュニティ・スクールの方からの助言を基に、「売上」と「三次のPR」という視点を心得てチラシを作成した。その際、生徒から「チラシ作りに詳しい方に教わりたい」という声が上がリ、広告会社の方に講師を依頼し、チラシのデザイン等を修正していった。ポップコーンについても試作を繰り返し、三次ふれあいフェスタ当日、目標であった200個を売り切った。

第3部では、目標に立ち返り、アンケートの整理・分析を行った。その成果や課題を踏まえて自分たちの成長をまとめ、お世話になった方々に活動報告会を行った。単元後の振り返りでは、「事前打ち合わせの時に、自分から会話をリードできたので、コミュニケーション能力が高まった。」など、自己の成長に対する記述や、「自分が住む地域のイベントにも関わってみたい。」「高めたコミュニケーション能力を高校生活にも生かしていきたい。」など、将来展望に関する記述が見られた。

3 研究の成果と課題等

使用した質問紙調査：総合質問紙調査 i-check【東京書籍】

実施時期：中学校第3学年は1月実施。その他の学年は2月実施。

(1) 成果

①PBLの考え方を取り入れながら、課題解決に向けて多様な他者と協働することで、「コミュニケーション能力」に関する資質・能力（【コミュニケーション能力】昨年度比：河内小+2.50%・三次小+22.02%・三次中+3.86%）及び、「地域貢献」に関する指標（全国比：河内小+29.40%・三次小+13.90%・三次中+8.87%）に伸びがみられた。

②指導者の声として、「子供たちが相手意識をもち、試行錯誤しながらも笑顔で積極的に活動する姿が多く見られ、こちらも嬉しくなるし、やる気が出る。」「生徒が探究課題を自分事として捉えたことにより、これまでと比べ、より一層意欲的に活動する姿が見られた。」など、肯定的な意見を得られた。

(2) 課題

①「主体性」「協調性」について、特に、中学校での高まりが不十分である。主体性については、「生徒自身が見通しを立てながら活動すること」、協調性については、「グループの中で、自らの役割を自覚しながら活動すること」に課題がみられる。（【主体性】昨年度比：河内小±0.00%・三次小+6.80%・三次中-1.17%【協調性】昨年度比：河内小+8.32%・三次小+27.42%・三次中-7.58%）

②「あなたは、学校生活の中で他の人が発言したり、発表したりするときに、質問をしていますか」という項目に対して、特に、中学校での肯定的回答率が低い。（肯定的回答：河内小87.50%・三次小65.70%・三次中29.57%）

(3) 今後の改善方策等

主体性の向上に向け、単元の導入時に生徒にとって必然性のある課題を設定し、生徒が目的に立ち返りながら課題を解決することができるようなツール（活動計画シート等）を活用させる。また、協調性については、目的の達成に向けた自己の役割を考え実行させ、振り返りの時間を十分確保することで質を高めていく。コミュニケーション能力についても、児童生徒自身が目的を踏まえ、視点をもって他者と協議し合えるようにする。